令和５年度伊賀地域高等学校活性化推進協議会のまとめ

令和６年２月

１　これまでの経緯

伊賀地域では、平成 16 年度から協議会を設置し、県立高校のあり方について検討を進め、平成 18 年度には、伊賀市内の専門高校３校を統合して新総合専門高校（**H21.4～伊賀白鳳高校**）を設置することをとりまとめるとともに、平成 27～33 年度頃には伊賀地域の県立高校は４校程度となることをイメージ化しました。

平成 22 年度に協議会を再開し、平成 24 年度までの検討の結果、名張桔梗丘高校と名張西高校を統合して普通科をベースとした新しい高校（**H28.4～名張青峰高校**）を設置することとしました。平成 25・26 年度は、伊賀地域における中高一貫教育の実施について協議を行い、新たに中高一貫教育校を設置することは難しいと結論づけました。平成 25～27 年度には、特別な支援を必要とする子どもたちの受入れと支援について協議しました。平成 27～29 年度には、専門学科の学科・コース、総合学科の系列について協議を行い、ニーズを把握するためのアンケート調査をふまえ、建築・土木コースの設置を進めていくことを確認しました。（**H31.4～伊賀白鳳高校に建築デザイン科を設置**）

令和元・２年度の協議では、当面の間、現在の５校を維持することが望ましいとしたうえで、今後中学校卒業者数がさらに減少することから、現在の５校の再編を含めて検討し、その結果を令和７年度頃までに明らかにする必要があるとしました。また、多様な学習ニーズにこたえる新しいタイプの学校の設置に関しては、どのようなニーズがあるかを的確にとらえるとともに、昼間定時制課程の併置を含めた定時制課程のあり方や、通信制課程の機能を取り入れた学習形態について検討する必要があるとしました。

令和４年度以降の協議会では、令和４年３月に策定した「県立高等学校活性化計画」に基づき、15 年先の当地域の中学校卒業者数の減少の状況もふまえ、伊賀地域の県立高校における学びと配置のあり方について協議を進めているところです。

【参考】「県立高等学校活性化計画」（令和４年３月策定）

「これからの時代に求められる学びを提供できる県立高等学校のあり方 」

・これからの高等学校は、社会の変化をふまえ、持続可能な社会の創り手を育成することが求められており、そのため、豊かな社会性・人間性を身につけられる環境が一層重要となっている。

・３学級以下の小規模校活性化の検証結果、15 年先までの中学校卒業者の減少の状況等をふまえると現行の高等学校の配置を継続していくのは難しい状況にあるため、各地域の高等学校の学びと配置のあり方について検討を進め、その中で１学年３学級以下の高等学校は統合についての協議も行う。これらのことについては、それぞれの地域の活性化協議会において具体的な内容を丁寧に協議する。

・こうした検討・協議は、統合という結論ありきで協議するのではなく、地域の実情に応じ丁寧に進めることとし、その際、状況に応じて、これまで取り組んできた、地域と連携した学びや学校独自の学びについての継承、交通が不便な地域における学びの機会の提供方策、分校化や校舎制への移行などについて協議することとする。

・次代の担い手となる三重の子どもたちがこれからも安心して学び、豊かな社会性・人間性が育まれる高校教育を進めていく。

２　令和元～４年度の当協議会での主な意見

（１）子どもたちに育みたい資質・能力

○ 指示されたことをやるだけでなく、自ら課題を見つけて解決していこうとする力が求められている。最近の若者には、忍耐力がついてきたと思う一方で、向上心に欠ける印象を受ける。学校での学習にとどまらず、地域社会にも関心を持ってもらいたい。

○ 子どもたちが社会の変化や身近な課題を、どれだけ自分事としてとらえられるかが重要であり、課題の解決に向けて、友だちと共同して取り組む経験を積むことが必要である。

○ これからは、失敗を恐れず挑戦できる力がますます重要になる。

○ 「自立する力」と「共生する力」が大切であると感じており、課題を解決する力や情報を活用する力、コミュニケーション力を育む教育を進めたい。

○ プレゼンテーション能力や表現力の向上が必要であると感じる。

（２）多様な子どもたちの状況と学習環境への対応について

○ 多様な学びを求めて地域外の通信制高校などへ一定数の子どもたちが進学する状況があるが、地域に昼間定時制の高校があれば、そういった子どもたちのニーズにも地域内で対応できる。その際、通信制の機能も持たせることでより幅広いニーズに応えることができる。

○ 不登校の子どもたちが増加傾向にあることから、個別最適な学びや少人数指導へのニーズが高まっている。

○ 高校受験に近い時期に来日した外国籍の子どもたちは、昼間に日本語教室で日本語を勉強しながら夜間定時制高校で学んだりする生徒が一定数いることから夜間定時制は必要である。

○ 夜間定時制がある上野高校と名張高校には全日制もあるので、昼間定時制を併設するのは、教室数の不足などハード的にも簡単ではない。また、英心高校桔梗が丘校へは一定の進学希望者があり、今後の動向を見極める必要がある。

（３）再編を検討するうえで大切にしたいこと

○ 学校や学級数を減らすことありきではなく、伊賀地域をどのように活性化していくのかという視点を忘れてはならない。

○ 伊賀地域は他地域からの流入が少なく、他地域への流出が多いので、どうやったら生徒を呼び込めるのかを議論したい。

○ 伊賀地域から人が離れていくのを防ぐためには、他地域にはない行政の施策が必要であり、学校活性化と地域活性化が両輪となることが大切である。

○ 「誰ひとり取り残さない」という視点から多様な選択肢をできる限り提供するには５校を維持することが望ましい。その際は、不登校や学び直しが必要な生徒など、困難を抱える生徒への配慮を大切にすべきである。

○ 子どもたちの多様なニーズに応じた数多くの選択肢を用意することは大切であるが、同時にそのことによる学校運営上の課題やデメリットも明らかにしながら、県立高校のあり方を考える必要がある。

○ 地域の人口そのものが減少しており、高校の配置についても現実的な話をする時期に来ている。教育にかけられる予算にも限りがあるので、いつまでも小規模校を維持し続けることはできず、どこかで再編の判断をする必要がある。
○ 伊賀北部で中学校卒業者数が減る中で高校の再編は避けられない。小規模化が進むと、上野高校で進学に必要な科目の講座を開設することが難しくなったり、伊賀白鳳高校で多様なコースを設置することができなくなったりする。その結果、伊賀市内の３校とも活性化できなくなることを危惧している。
○ あけぼの学園高校のニーズはあるが、伊賀地域には総合学科が２校あることから、再編にあたっては、総合的・包括的に考えることが大切である。
○ 生徒数の減少を客観的に判断すれば４校への再編は避けられないのではないか。
○ 学校運営を考えると学校の規模は少なくとも１学年４学級は必要である。一方で、あけぼの学園高校は２学級だからこそ、不登校傾向の生徒や学び直しが必要な生徒たちが安心して学び、意欲的に活動できている。
○ あけぼの学園高校は、これまでの活性化の取組によって特色化・魅力化が図られている。一方で、学校規模も大切であり、一定規模の学校が必要となったときに、あけぼの学園高校が担っている役割を他の４校で担えるのかどうかや、上野高校や名張高校の夜間定時制に昼間定時制を加えることができるのかどうかについて、議論しておく必要がある。
○ 以前から伊賀地域の県立高校のよさが中学生や保護者にうまく伝わっていないと言われている。将来を見通した議論に加え、各学校のＰＲをしっかりすべきだ。

（４）交通網に係る課題について

○ 再編を考えるうえで、交通の便がよくないことに対する解決策を考える必要がある。
○ 北部と南部の行き来が少ない要因の１つは伊賀鉄道だが、あけぼの学園高校は、直通バスにより南部からの進学者が増えた可能性がある。
○ あけぼの学園高校の通学バスの年間定期パスについても、保護者の経済的負担は大きいことから、近鉄沿線の学校を選んでいる生徒はいると思われる。
○ 学びの選択肢だけでなく、新しく校舎を作ったりバイク通学を認めたりするなど、交通手段の選択肢も含め、いろいろなアイデアを出し合う必要がある。
○ 仮に伊賀地域の５校が協力して通学バスを走らせれば、利便性が向上し、通学費用も安くなるかもしれない。一方で大切なインフラ（伊賀鉄道）の経営を圧迫することにもなりかねない。
○ 地域の高校の特色化・魅力化が図られなければ、交通の便がよくなったときに、さらに他地域への進学者が増えることも考えられる。

（５）今後の協議に向けて

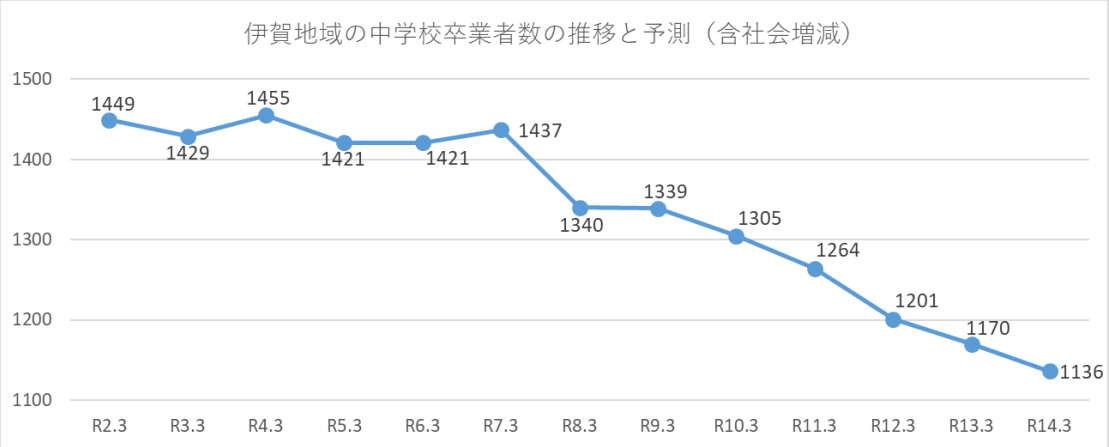
○ 先を見据えた議論は大切であるが、時間はすぐに過ぎてしまう。令和５年度の協議では、事務局から何らかの方向性を具体的に示してもらいたい。
○ 今後の高校のあり方を考えていくためには、実際に高校に入学する子どもたちのニーズを把握することが大切であり、令和５年度から６年度にかけてアンケート調査を行ってはどうか。

３　当地域の県立高校を取り巻く状況（令和５年度の協議会資料より）

（１）伊賀地域の中学校卒業者数の推移と予測

三重県の中学校卒業者数は、令和５年３月の 16,055 人から、令和 14 年３月には 13,487 人（令和５年３月比 2,568 人減）となることが見込まれており、引き続き減少が続きます。減少の度合いは地域によって異なりますが、当地域においては、以下の通り予測されています。

令和　５年３月　1,421 人
令和　８年３月　1,340 人（令和５年３月比 081 人［ 5.7%］減）
令和 10 年３月　1,305 人（令和５年３月比 116 人［ 8.2%］減）

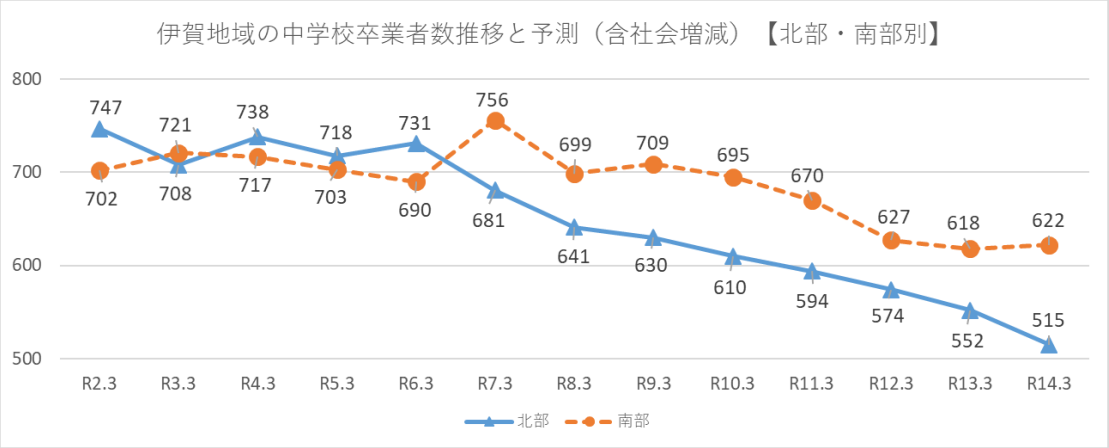


また、令和４年度の当地域の出生者数は 793 人となっています。

このことから、当地域全体の県立高校（全日制）の１学年の学級数は、中学校卒業者の進路状況が現在と大きく変わらない場合、令和５年度の 25 学級（40 人学級として）から、令和 20 年度には 12～14 学級になることが予想されます。

なお、伊賀地域においては、北部（伊賀市から旧青山町を除く）と南部（名張市に旧青山町を加える）別にも中学校卒業者数の推移を以下の通り検証しています。

＜伊賀北部＞令和　５年３月　718 人
令和　７年３月　681 人（令和５年３月比 037 人［ 5.2%］減）
令和　８年３月　641 人（令和５年３月比 077 人［10.7%］減）
令和 10 年３月　610 人（令和５年３月比 108 人［15.0%］減）
＜伊賀南部＞令和　５年３月　703 人
令和 11 年３月　670 人（令和５年３月比 033 人［11.0%］減）
令和 12 年３月　627 人（令和５年３月比 076 人［15.5%］減）



（２）直近５年の公立高校の学校別第１学年学級数の推移

平成 31 年度には地域で 28 あった学級数が、４年後の令和５年には 25 学級となっています。なお、この地域では、平成 21 年度に上野農業、上野工業、上野商業が統合し伊賀白鳳高校を、平成 28 年に名張桔梗丘と名張西を統合し名張青峰高校を開校しています。

	H31	R2	R3	R4	R5
上野	7	7	7	7	6
あけぼの学園	2	2	2	2	2
上野農業					
上野工業					
上野商業					
伊賀白鳳	7	7	6	6	6
名張	5	4	5	5	5
名張桔梗丘					
名張西					
名張青峰	7	7	6	6	6
合　　計	28	27	26	26	25

H20	H21	H27	H28
8	8	7	8
2	2	2	2
2			
3			
4			
	7	7	7
5	5	5	6
6	6	4	
7	7	4	
			8
37	35	29	31

※網掛けは前年度に対する学級増減

（３）直近５年の公立高校の学科別第１学年学級数の推移

平成 31 年度には地域で 28 であった学級数が、４年後の令和５年度には、普通科で２減、専門学科で１減（農業、工業、商業、福祉それぞれで定員を 5 または 10 人減）し、地域で 25 学級となっています。

		H31	R2	R3	R4	R5
普通科※		14	14	13	13	12
専門学科	農業科	2	2	2(70)	2(70)	2(70)
	工業科	3	3	3(105)	3(105)	3(105)
	商業科	1	1	1(30)	1(30)	1(30)
	家庭科					
	福祉科	1	1	1(35)	1(35)	1(35)
総合学科		7	6	7	7	7
合　　計		28	27	26	26	25

H20	H21	H27	H28
21	20	14	16
2	2	2	2
4	4	4	3
1	1	1	1
1			
1	1	1	1
7	7	7	8
37	35	29	31

※普通科は普通科系専門学科（理数科等）を含む

※学級数は 1 学級 40 人としているが、R3 以降の専門学科の(　)内の数値は人数を表す

（４）伊賀地域の専門学科と総合学科の学び

伊賀地域の専門学科である伊賀白鳳高校や、総合学科である名張高校とあけぼの学園高校には、コースや系列など学びが細分化されており、そのいくつかについては学校間で共通する学びが多くあります。

	職業系専門学科	総合学科	
	伊賀白鳳	あけぼの学園	名張
デザイン	デザインコース（建築デザイン科）	－	美術（表現デザイン系列）
食　　物	パティシエコース（フードシステム科）	製菓調理系列	－
商　　業	経営科	情報教養系列	総合ビジネス系列
服　　飾	－	美容服飾系列	ファッション（表現デザイン系列）
福　　祉	介護福祉コース	健康福祉系列	健康スポーツ系列

（５）伊賀地域の公立中学校卒業者の進路状況

伊賀地域の公立中学校卒業者は、伊賀地域の全日制県立高校へ約 70%が進学しています。一方、他地域の全日制県立高校と通信制高校へ 10%弱、県内全日制私立高校と県外全日制高校、高等専門学校へ５%弱が進学しています。

令和５年度の進路状況をみると、津高校と津西高校への進学が 63 人、令和４年度に開校した英心高等学校桔梗が丘校へ 57 人、近大高専へ 53 人、山辺高校山添分校（奈良県）へ８人が進学しています。

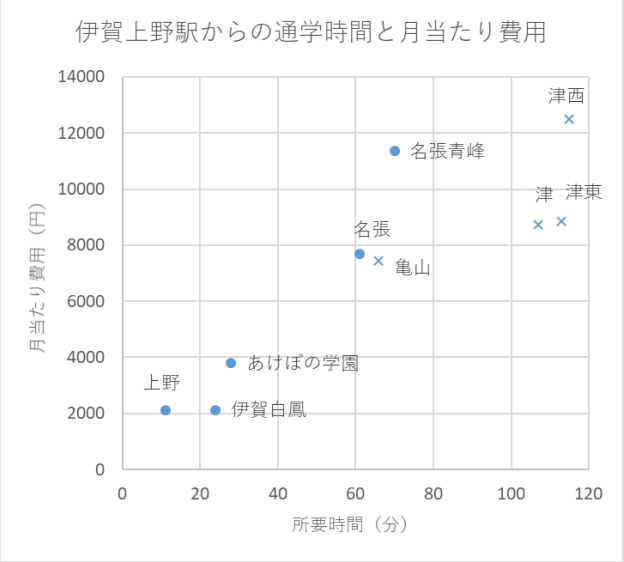
令和５年３月中学校卒業者の進路状況

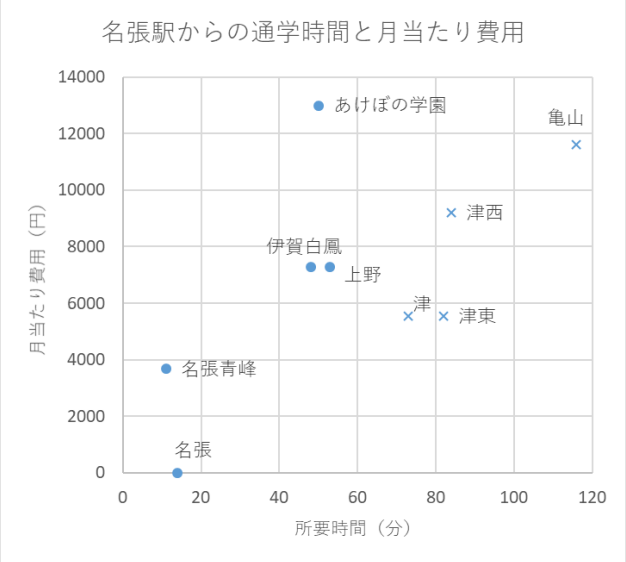
区分	地域内 県立全日	他地域 県立全日	県内 私立全日	県外 全日	定時制	通信制	高専	特支	その他	計
人数	922 (67.7%)	115 (8.4%)	46 (3.4%)	60 (4.4%)	28 (2.1%)	98 (7.2%)	61 (4.5%)	10 (0.7%)	22 (1.6%)	1,362

（６）通学に係る学校までの所要時間と月当たりの通学費の状況

通学費用については、伊賀市の「伊賀鉄道の通学定期券購入費の一部助成（1/2 補助）」の支援や、三重交通の「通学定期券の特別割引（通学フリー券年間 156,000 円）」の仕組みがあります。伊賀地域の主要駅から地域の５校への通学に係る所要時間と月当たりの通学費について、伊賀上野駅からは上野高校が時間的に近くて安く（11 分、2,124 円）、名張青峰高校が時間的に遠くて高い（1 時間 10 分、11,368 円）状況です。名張駅からは名張高校が徒歩圏内であり、上野高校が時間的に遠く（53 分）、あけぼの学園高校が高い（13,000 円）状況です。

また、伊賀地域から地域外である津地域や亀山地域の高校への通学費用は、地域内の高校に通うより安価となる場合もあります。（以下は、費用順の資料をもとに作成）





（７）高等学校の卒業者の進路状況

全日制県立高校卒業者の進路状況は、上野は 90.2%が４年制大学へ、あけぼの学園は 73.4%が就職へ、伊賀白鳳は 59.2%が就職へ、名張は 37.9%が専修・各種学校等へ、名張青峰は 58.8%が４年制大学へとなっています。

令和５年３月伊賀地域の高校卒業者の進路状況

区分	４年制大学	短期大学	専修・各種学校等	就職	その他	計
人数	452 (45.8%)	55 (5.6%)	185 (18.8%)	252 (25.6%)	42 (4.3%)	986

４　学校規模による教育環境の比較

（１）学習指導

普通科における、選択科目の設置による多様な学びの提供や大学進学に向けた指導の充実と、学校規模との関係について、資料をもとに以下の傾向を確認しました。

・学校規模が大きくなると、開設科目が増加する傾向がある
・１学級増えるごとに３年間で５～７人の教員が増える
・理科、地歴公民の各科目を専門とする教員の複数配置や、英語、数学、国語の各学年への複数配置のためには８学級が理想であり、実現が難しい場合、少なくとも６学級はあるほうが望ましい

（２）部活動

令和４年度の本県の運動部及び文化部の登録状況により、部活動の設置数や登録状況と学校規模との関係について、資料をもとに以下の傾向を確認しました。

・学校が設置している部活動数は１学年の学級数と比例しており、１学年８学級規模の学校では運動部と文化部を合わせてと 32.6 部設置している（１学級では 9.0 部）
・在籍生徒に占める部活動に登録している割合（含重複登録）は、１学年の学級数が多くなるほど増える傾向があり、１学年８学級規模の学校では重複を含め約９割の生徒が部活動に登録している
・１部活動あたりの登録者数の平均人数は在校者数と比例しており、１学年８学級規模の学校では１部活動あたり３学年あわせて 25.9 人が登録している。（１学級では 5.4 人）

（３）国の動向

国は公立小中学校における小規模校のメリットと課題を次のように整理しています。

＜一般に小規模校に存在するとされるメリット（抜粋）＞
・一人一人の学習状況や学習内容の定着状況を的確に把握でき、補充指導や個別指導を含めたきめ細かな指導が行いやすい
・異年齢の学習活動を組みやすい、体験的な学習や校外学習を機動的に行うことができる
・地域の協力が得られやすいため、郷土の教育資源を最大限に生かした教育活動が展開しやすい
＜一般に、学級数が少ないことによる生じうる学校運営上の課題（抜粋）＞
・加配なしには、習熟度別指導などクラスの枠を超えた多様な指導形態がとりにくい
・体育科の球技や音楽科の合唱・合奏のような集団学習の実施に制約が生じる
・児童生徒から多様な発言が引き出しにくく、授業展開に制約が生じる

国の調査では、積極的な動機付けにより学校選択を行った者は、進路選択の満足度が高い傾向がある一方で、他者にすすめられた等、他律的な動機付けによる学校選択を行った者は、進路選択の満足度が低い傾向があると分析しています。

＜積極的な動機付け＞
・将来就きたい仕事と関連しているから　　・入部したい部活動があったから
・特色ある取組を行っているなど授業内容に興味があったから
＜他律的な動機付け＞
・親や親戚、中学校、塾、家庭教師の先生にすすめられたから
・友人が選択していたから　　・合格できそうだったから

国は、一定の小規模校を地域に残す必要がある場合に、小規模校の教育条件の改善につながる方策について、次のように整理しています。

・同時双方向型の遠隔授業　　・地域との協働や他校との連携の推進

また、普通教育を主とする学科において、特色・魅力ある教育を実現するため、「学際領域学科」や「地域社会学科」を設置するなど普通科改革を進めることとしています。

（４）県の取組

県は、人口減少に対応した学びの推進について、次の取組を進めています。

・ＩＣＴを活用し、学校を越えてつながる夏季課外や専門的な学びの推進
・通信制高校のサテライト教室の設置

５　伊賀地域の５校それぞれが学級減となる場合の影響（令和５年度第２回協議会資料より）

伊賀地域の５校それぞれが学級減となる場合、現状と比較して、５つの学校に共通する影響や、学校個別の影響は次のとおりです。

（１）学校に共通する影響

①教員数が減少する（３年間で約５～７人の減）

・多様なコースや選択科目の開設が難しくなる
・芸術や家庭などの専門の教員が常駐できない教科が増える
・部活動顧問の配置が困難となり設置する部活動数が減る
・部活動において専門性の高い指導者の確保が困難となる

②生徒数が減少する（１学級 40 人、３学年 120 人の減）

・体育祭や文化祭などの学校行事の規模が小さくなる
・部活動あたりの参加人数が少なくなる可能性がある

（２）学校個別の影響

①学科や系列の見直しが必要となる場合がある

・学校では、学びの選択肢が減少する
・他校で同様の学びがない場合は、地域全体から特定の学びがなくなる

【参考】伊賀地域の５校それぞれが学級減となった場合の学校個別の影響

	学校個別の影響	普通科系、総合学科、専門学科の定員割合 Ｒ６（55.0%：24.2%：20.8%）
上野	・５学級になるため進学指導体制に影響 ・普通科改革（国事業）の計画に影響	53.4%：25.1%：21.5%
伊賀白鳳	・５学級における学科改編が必要 ・現在６学級規模を７学級展開 ・５学級での科とコースの整理が必要	57.0%：25.1%：17.9%
あけぼの	・１学級における系列の改編が必要 ・現在の４系列を２系列程度に改編	57.0%：21.5%：21.5%
名張	・専門性の高い教員の確保が困難 ・現在の９専攻の見直しの検討が必要	57.0%：21.5%：21.5%
名張青峰	・５学級になるため進学指導体制に影響	53.4%：25.1%：21.5%

６　令和５年度の協議内容と主な意見

（１）令和５年度の協議会の概要

〇第１回　令和５年７月 25 日（火）

地域の少子化のさらなる進行により、令和４年度に生まれた子どもたちが高校へ入学する 15 年先には、伊賀地域における 1 学年の総学級数が現在の 25 学級規模から 12～14 学級規模となることが見込まれる中、当協議会の「令和元・２年度の協議のまとめ」や令和３年度と４年度の協議をふまえ、当地域における県立高校の学びと配置のあり方について協議しました。

〇第２回　令和５年 10 月 30 日（月）

地域の少子化がさらに進行し、令和４年度に生まれた子どもたちが高校へ入学する 15 年先には、伊賀地域における１学年の総学級数が、現在の 25 学級規模から 12～14 学級規模となることが見込まれる中、当協議会の「令和元・２年度の協議のまとめ」や令和３年度以降の協議をふまえた県立高校の学びと配置のあり方と、令和 10 年度頃までに想定される段階的な学級減への対応の方向性について協議しました。

〇第３回　令和６年２月 26 日（月）

「令和元・２年度の協議のまとめ」や令和３年度以降の協議をふまえ、令和 10 年度ごろまでに見込まれる段階的な学級減への対応の方向性について検討し、「令和５年度伊賀地域協議会のまとめ」の策定に向けた協議を行いました。また、中学生とその保護者へのアンケートの実施方法や内容等について検討しました。

（２）令和５年度の協議会の主な意見

≪学校規模について≫

○ 伊賀地域として５校を維持し学びの選択肢を残すために、各学校が魅力化に取り組み、伊賀市も伊賀鉄道の通学定期券購入費の一部助成を行ってきたが、地域全体の入学者数の増加には現状では結びついていない。

○ 令和 10 年度までは、５校を維持し、小規模校を存続することにより子どもたちの多様なニーズにできる限り応えていくことが望ましい。これ以上普通科を減らすと進学指導に影響が生じたり、専門学科を減らすと現在ある学科がなくなったりする影響を危惧する。

○ 学級減によって教員数が減ることにより、担任を含めた校務の兼務が必要となり、その結果、子どもに向き合う時間の確保が難しくなる。同様に、部活動顧問の兼務も必要となり、専門性の高い指導者の配置も難しくなる。各学校が小規模化することのデメリットを考慮して協議を進める必要がある。

○ 一定の学校規模がないと、多様な授業を展開できず、その結果、生徒の進路実現に影響が出ることを懸念している。

○ 大学入試において推薦入試や総合型選抜が拡大し、部活動の成績や活動実績を生かして進学するケースも増えているため、ある程度、部活動の量と質を保障できることが望ましい。

○ 学校規模が小さくなると、生徒の理解度に応じた授業展開が難しくなったり、理科や芸術において専門の教員が常駐できず、その分野に進学したい生徒に十分な指導を行うことができなくなったりする。生徒の進路実現のためには、一定の学校規模があったほうがよい。

○ 統合することとなっても、現在の５校の魅力や担っている役割は、何らかの形でこれからの子どもたちにも残したい。

○ 文科省の資料によると、小規模校にはメリットもあるが課題も多い。また、施設の維持管理にもかなりの費用がかかることから、最低６学級できれば７学級を維持できるよう統合していくことが望ましい。今後の５年間は、できる限り５校を維持しつつ、新たに６学級を下回る規模の学校が生まれるときには５校の再編もやむを得ないのではないか。

≪進路指導の視点から≫

○ 中学校では、高校への入口だけでなく３年後の出口も意識した進路指導を行っており、伊賀地域にどのような学びをどのような形で残すかを議論の柱とすべきである。

○ 労働人口が大きく減少し、採用活動が難しくなっている中で、地元採用した方は長く勤めていただけることが多く、地域の大きな力になっている。どのような人材を育てるかは、地域の企業にとっても大切なテーマである。

≪通学の利便性の視点から≫

○ 校区が決まっている小中学校とは異なり、高校の配置は生徒の通学状況もみながら議論する必要がある。

○ 普通科を希望する生徒にとって、通学時間や通学費は高校を選択する大きな要素となっており、近鉄沿線の名張市から津方面への流出は今後も続くと考えられる。当地域の普通科の改革に取り組み、もっと魅力を高めてもらいたい。

○ 学級減となると、通学用のバスの利用者が減り、これまで通りの運行が期待できなくなる可能性がある。

○ 高校の再編を考えるにあたっては、生徒の安全を考慮したうえで、バイク通学など多様な通学方法の検討が必要ではないか。ただし、このことについては自治体の通学費の補助制度などの公共交通機関の利用促進の取組も合わせて考える必要がある。

≪地域づくりの視点から≫

○ 地域から学校がなくなるのは、まちづくりの視点からも深刻な問題である。そうした中、県内でも試験的に実施されている同時双方向型の遠隔授業や、通信制高校のサテライト教室は、この地域でも早期に取り組んだほうがよい。

○ 母校がなくなりさびしい思いもあるが、当時の友人とのつながりは永遠に続く。学校自体はなくなったとしても母校は心の中に持ち続けることができる。

≪高校の特色化・魅力化と情報発信等について≫

○ 伊賀地域の高校もそれぞれ特色があるので、部活動も含めて、あの学校に行ってこんなことをやりたい、こんな学びをしてみたいなどの思いを小学校段階から抱かせるような仕掛けが大切である。

○ 不登校を経験した生徒にとって、少人数で丁寧なサポートをしてもらえる通信制高校は魅力である。

≪県立高校の学びと配置のあり方について≫

○ 多様な選択肢をできるかぎり地元で提供するという意味では、今ある５校を維持することが望ましい。地域の学校を活性化させて、伊賀地域の子どもたちが、他の地域に出て行かなくても自分の希望に応じて学べる環境を整えられるようにしたい。

○ 15 年先には、現在の１学年 25 学級から 12～14 学級になる中で、５校のままであれば、各学校とも２～３学級ずつ減らさなければならない。この地域の子どもたちのニーズにより的確に応えるには、どのくらいの学校規模の高校が望ましいのかを議論すべきだ。

○ 学校が小規模化すると、部活動の維持は難しくなる。教員数も減るため、芸術や家庭など授業時間数の少ない教科では、専門の教員を常勤で配置できなくなる。

○ 伊賀地域の高校のあり方は、北部と南部に分けるのではなく、地域全体で考えるべき。

○ 子どもの数の減少と、他地域への流出者数が多いという伊賀地域の大きな２つの課題をふまえると、学びの選択肢を維持するのは統合なしでは難しい。

○ 統合しても校舎制にするとか、統合する学校の学びは他の学校で引き継ぐなど、具体的な選択肢を事務局が複数出したうえで手遅れになる前に十分議論を尽くすべきである。

○ 今後の中学校卒業者数の減少を考えると、地域内だけで多様な選択肢を維持することが難しくなるため、生徒の地域間の移動もふまえたより広いエリアで高校の学びと配置のあり方を検討する必要があるのではないか。

≪今後の協議の進め方について≫

○ 15 年先に 12～14 学級規模になるとすると、いずれは伊賀地域だけでなく県全体で枠組みを考えなくてはいけない時期がやってくる。このことから、令和 10 年度頃までと 15 年先の議論は分けたほうがよい。

○ 学びの主体である子どもたちにアンケートを実施し、その結果を重視してほしい。

○ 15 年先を見据えて高校の学びと配置のあり方を考えるのであれば、中学２年生の保護者だけではなく、より幅広い学年の保護者を対象としてアンケートを行ってもよいのではないか。

○ これから高校に入学する子どもたちや保護者が、進路について考える時間を十分に確保できるよう、３年前といわず少しでも早く方向性を示すべきである。

（３）これまでの協議における意見や考え方の整理

令和元年度から４年度までの協議をまとめたもの（令和５年度第１回協議会資料）に、令和５年度の意見を加えました。次の意見や考え方については、今後もさらに協議を重ねながら、15 年先を見すえた当地域の高等学校の学びと配置のあり方として整理し、まとめていくこととしています。

また、このことをふまえ、令和 10 年度までに想定される段階的な学級減への具体的な対応についての協議も進めていきます。

①子どもたちに育みたい資質・能力について

- 自ら課題を見つけて解決する力
- 課題の解決に向けて協働する力
- 失敗を恐れず挑戦する力
- 自立する力と共生する力
- コミュニケーション能力
- 情報を活用し、伝える力
- 地域社会への関心

②多様な子どもたちの状況と学習環境への対応について

- 地域外へ進学する生徒が一定数あることから、地域内で多様なニーズに応えていくことが必要
- 不登校傾向の子どもたちが増えており、昼間定時制や通信制のニーズが高まっている
- 日本語を学びながら高校へ通いたい生徒にとって夜間定時制は必要
- 特別な支援を必要とする子どもたちの中には、特別支援学校高等部ではなく高校で学びたい生徒がいる
- 英心桔梗が丘校は子どもたちのニーズを一定満たしているが、開校２年目であることから、今後の生徒の進路動向を注視することが必要
- 全日制・定時制・通信制を別々に考えるのではなく、複数の機能を併せ持った学校を考える視点も必要
- 全日制高校において、少人数で丁寧なサポートを実現するためには、地元企業や地域の方の力を活用することが必要

③再編を検討するうえで大切にしたいこと

・高校の特色化・魅力化とその情報発信により他地域への流出抑制につなげる
・多様な選択肢を提供するために、できるかぎり５校を維持する視点が大切
・数多くの選択肢を維持することは大切であるが、中学校卒業者数が減少する中で、学校運営上の課題やデメリットも明らかにしたうえで検討を進めることが必要
・できる限り地域の子どもたちの学びを保障できるよう、効果的・効率的な学校運営を考えることが必要
・役割や機能が近い学校をできるだけ集約させ、スケールメリットを生かして子どもたちに選択肢のある学びを提供していくことが必要
・子どもの数の減少と、他地域への流出が多いことをふまえると、統合なしでは学びの選択肢を維持するのは難しい
・小規模校だからこそ通える生徒への配慮が必要
・それぞれの学校の学びや役割をどのように引き継ぐかが大切
・消極的な方向ではなく、未来から発想するようなアイデアで活性化を考えることも大切
・北部と南部に分けるのではなく、地域全体で考えることが必要
・地域内だけで多様な選択肢を維持することが難しくなるため、生徒の地域間の移動もふまえたより広いエリアで高校の学びと配置のあり方を検討する必要

④交通網に係る課題について

・学びの選択肢の確保に加え、それを選択できる交通手段の整備が必要
・通学に係る経済的負担や時間も高校を選択する上で重要な要素である
・地元自治体を巻き込んだ議論が必要
・自治体の通学費の補助制度や各公共交通機関の取組について周知が必要

⑤今後の協議に向けて

・伊賀地域５校の特色と活性化・魅力化の状況が知りたい
・事務局から学級減への対応の具体案を提示してほしい
・子どもたちのニーズを把握するため、アンケート調査を実施してはどうか
・県内外の先行事例を参考にしたい
・子どもたちや保護者が、進路について考える時間を十分に確保できるよう、３年前といわず少しでも早く方向性を示すべきである。

7　今後の伊賀地域の高等学校の学びと配置のあり方について（当協議会のまとめ）

（１）これまでの経緯

○ 伊賀地域の高等学校は、平成５年度に８校が配置され、第１学年の 55 学級をピークとして以降、学級数は徐々に減少し、令和６年度は５校が配置され、第１学年は 25 学級（1 学級 40 人として）となっています。

○ この間、当協議会では、高等学校の学びと配置のあり方を協議し、伊賀市内の専門高校３校を統合した総合専門高校の設置（H21）や、名張市内の２校を統合した普通科高校の設置（H28)、専門学科における建築に係る学科の設置（H31）について取りまとめてきました。

○ その後、令和元・２年度の協議のまとめ（以下、「令和元・２年度まとめ」という）では、県立高等学校のあり方として、次の３点をとりまとめました。

> ① 当面の間、現在の５校を維持
> ② 現在の５校の再編を含めて検討し、その結果を令和７年度頃までに明らかにすることが必要
> ③ 昼間定時制課程の併置を含めた定時制課程のあり方や通信制課程の機能を取り入れた学習形態について検討することが必要

○ 令和元・２年度まとめ以降、伊賀地域では、中学校卒業者数の減少に伴い、令和３年度と令和５年度にそれぞれ１学級（40 人）の学級減を行っています。

○ なお、令和３年度の学級減については、地域の専門学科の学びを維持するため、伊賀白鳳高校において１学級あたりの人数を減らし、学級数を維持することとしています。

○ こうした中、本協議会では、令和元・２年度まとめに示された３点をふまえながら協議を深めることとし、これまでの意見や考え方をまとめるとともに、次の資料も共有してきました。

> ・中学校卒業者の地域間の移動状況
> ・主要駅から地域内外の高校への通学所要時間と通学費等
> ・令和４年度に地域内に開校した私立通信制高等学校への進学状況
> ・他地域の協議会の状況や国の動き等

（２）伊賀地域の県立高等学校の学びと配置のあり方の検討の方向性

○ 当協議会では、伊賀地域の子どもたちに、社会の変化が激しい中、これからの時代を生きていくため、自立する力と共生する力を育むことが重要であるとしました。また、子どもたちには、コミュニケーション能力や、情報を活用し伝える力を高めるとともに、地域社会への関心を持ち、自ら課題を見つけ協働し解決に向けて取り組み、失敗を恐れず挑戦できるよう育ってほしいとしました。

○ この５年間の伊賀地域の中学校卒業者の進路状況は、地域内の全日制県立高校への進学が減少傾向であり７割を切る状況となりました。一方、他地域の全日制高校へは、この２年やや減少したものの約 1.5 割が進学し、定時制、通信制、高専へは、この２年増加し、約 1.5 割が進学しています。特に、当地域の中学校卒業者の１割近くが津市内の全日制高校へ進学する状況が続いています。

○ 一方、当地域においては、不登校傾向の子どもたち、特別な支援が必要な子どもたち、外国につながる子どもたちなどの多様な教育ニーズへの対応が必要な状況があります。公立の特別支援学校、夜間定時制に加え、近年、地域内に私立の通信制が開校し、当地域からも一定数が進学している状況です。

○ こうしたことをふまえ、当協議会は、これからも続く少子化の中、地域の子どもたちができる限り当地域における学びを選択できるよう、学校個別ではなく伊賀地域全体を見通す視点を大切にして、伊賀地域の高等学校の学びと配置のあり方について協議を進めます。

○ このことは、現在の当地域の中学校卒業者数の状況や、今後も少子化が継続して進行することをふまえ、これからの子どもたちのため、スケジュール感に注意して機を逸することなく協議を取りまとめていくこととします。

○ 協議にあたっては、これまで重ねてきた当協議会での議論や当地域の中学校卒業者の進路状況及びニーズをふまえ、次のことを基本として進めます。

１－１ 専門学科のコースや総合学科の系列など多様な学びの選択肢の維持 －２ 普通科の一定規模の維持

○ なお、具体的な協議を進める際には、県立高等学校活性化計画に示された考え方に加え、次の視点も大切にし、当地域の実情をふまえた丁寧な議論を行います。

２－１ 少子化の中にあっても、消極的な方向ではなく未来に向けて前向きに発想すること －２ 北部と南部に分けることなく伊賀地域全体で考えること、また、状況によっては隣接する地域も含めて考える必要があること －３ 役割や機能が近い学校をできるだけ集約させ、スケールメリットを生かすこと －４ 学校の選択肢を維持できるよう、当面の間は５校を存続すること －５ 小規模校だからこそ通える生徒へ配慮すること －６ 通学方法や通学時間、必要となる交通費などの状況を考慮すること

○ また、子どもたちの多様な教育ニーズへの対応その他については、次のとおり整理することとします。

３－１ 定時制や通信制に係る多様な学びについては、当地域に新たに開校した私立通信制高校に対する生徒の動向を注視していくこと －２ 生徒の通学については、自治体の通学費の補助制度や各公共交通機関の取組について周知をしていくこと

（３）今後について（検討のスケジュール等）

○ 当協議会はこれまで、他地域に先駆け、伊賀地域の高等学校の学びと配置のあり方をとりまとめてきました。このことは、県立高等学校の活性化の取組となり、急激な少子化の中にあっても未来を前向きにとらえた伊賀地域の学びの実現につながっています。

○ こうした中、当地域では平成 28 年度に現在の５校配置となりましたが、少子化はさらに進行し、令和３年度の学級減では、伊賀白鳳高校において、地域における専門学科の学びの選択肢をできる限り維持するため、学級数はそのままにして定員のみを減じることとしました。（40 人×７学級＝280 人定員→35 人×６学級＋30 人×１学級＝240 人定員）

○ これにより伊賀白鳳高校は６学級規模の教員数で７学級を維持することから、学科内のコースの削減や教職員への負担増など、少なからず学びや学校運営への影響が生じています。

○ このことから、当地域においては、現状の学びの選択肢を維持しながら、今後の学級減へ対応することが難しくなっています。

○ 今後の当地域の中学校卒業者数は、令和５年３月卒と比較すると、令和８年３月卒は２学級程度の、令和 10～14 年３月卒は５年間継続して毎年１学級程度の定員減が見込まれ、合わせて７学級程度の学級減の可能性があります。

○ 特に、伊賀北部では、令和５年３月卒と比較して、令和７～14 年３月に段階的ではあるものの合わせて５学級程度の学級減の可能性があります。

○ このことは、令和５年度現在、伊賀北部３校あわせて 560 人の定員が、令和 14 年度には 360 人（９学級）程度となることを意味し、今後の対応が非常に難しい状況です。

○ こうしたことから、当協議会では、現在の学校の状況と少子化の進行をふまえ、伊賀地域の高等学校でこれからの子どもたちに必要となる学びを実現するため、当地域の高等学校の学びと配置のあり方について、検討の方向性を基本として協議を進め、機を逸することなく意見を取りまとめていくことが必要です。協議にあたっては、中学生やその保護者を対象としたアンケートを実施し、その結果もふまえて検討することとします。

○ 多様な教育ニーズに応じた学びの検討については、引き続き、令和４年度に開校した私立通信制の状況と生徒の動向に注視していくこととします。

○ なお、これまでの協議をふまえ、令和７～８年度に想定される学級減に対しては、検討の方向性に基づき５校の維持が望ましいと考えます。また、令和 10 年度以降の学級減に対しては、現在の５校の再編を含めて検討し、その結果を令和７年度までに、当協議会の考え方としてとりまとめます。

【参考】令和元・２年度の協議のまとめ（令和３年３月）抜粋

３ 県立高等学校のあり方（当協議会の考え方）

令和８年度末（令和９年３月）までに、伊賀地域北部で中学校卒業者数が減少していくことが予測されることから、北部で２学級（80 人）程度の定員減が見込まれます。このような中、協議会では伊賀地域における今後の県立高校のあり方について、現行５校の維持、４校への再編、多様な生徒の学習ニーズに対応した新しいタイプの高校の設置などの意見が出されました。

これまで、伊賀地域の県立高校は、地域の人材育成に貢献する学校、大学等への進学に対応した学校、多様な子どもたちが安心して学び意欲的に活動できる学校、ＩＣＴを活用した学びやグローバルな活動に取り組む学校など、それぞれの特色や魅力を生かしつつ地域と連携しながら、子どもたちのよりよい学びの実現のためにその役割を果たしてきました。今後も子どもたちの幅広い学習ニーズに対応し、多様な進路希望の実現のためにできる限り多くの選択肢を確保する観点から、当協議会としては、当面の間、現在の５校を維持することが望ましいと考えます。その場合、北部の高校において定員減を行う必要があるとともに、生徒数が減少していく中で、現状のままの学習内容を維持することは難しいことから、伊賀地域全体を見通した学習内容の検討をする必要があります。

一方、令和９年３月からの２年間で、中学校卒業者数がさらに 90 人程度減少することが予測されており、この減少に従前のとおり各校の学級減で対応していくと各校の小規模化が一層進行し、部活動や学校行事も含めた活性化や魅力の維持向上が難しくなることが考えられます。このことから、現在の５校の再編を含めて検討し、その結果を令和７年度頃までに明らかにする必要があり、その際は、それぞれの学校の果たしている役割や学びの選択肢をどう整理し分担していくかに加え、学習ニーズを踏まえながら各校の特色化・魅力化を見据えて検討を進めることが求められます。

また、不登校傾向の子どもたちや特別な支援を必要とする子どもたち、日本語の習得を要する外国にルーツのある子どもたちなど、多様な学習ニーズに応える新しいタイプの学校の設置に関しては、子どもたちの学びのスタイルなどについて、どのようなニーズがあるかを的確に捉えるとともに、当地域の夜間定時制課程が果たしている役割を考慮しつつ、昼間定時制課程の併置を含めた定時制課程のあり方や通信制課程の機能を取り入れた学習形態について検討する必要があります。

以上を踏まえ、当地域の県立高校が魅力や特色を発揮し、子どもたちが生き生きと学びこれからの時代を生きる力をつけていく場となるよう、当協議会において次期県立高等学校活性化計画期間中（令和４年度から８年度までの５年間）に当地域の県立高校のあり方について協議を進めるとともに、県教育委員会に具体的な検討を進めるように求めるものです。

４ 今後に向けて

当協議会は、当地域の中学校卒業者数の減少や価値観の多様化、環境の変化など伊賀地域の高等学校を取り巻く状況の変化を見据え、子どもたちや保護者のニーズを把握し、進路希望や入学者選抜の状況を踏まえながら、不登校生徒などの多様な生徒の学習ニーズへの対応や、全日制高校の再編を含めた具体的な検討を進めるなど、子どもたち一人ひとりに寄り添った学習環境づくりに向けて協議していきます。

あわせて、当地域の県立高校の活性化に向けて、地域や産業界の協力のもと地域に根ざした学習活動の充実や、効果的な情報発信やＰＲにより学校の魅力をわかりやすく伝える取組などについても、当協議会として協議していきます。

伊賀地域の中学校卒業者数の推移と予測（含社会増減）【市別、北部・南部別】

参考資料１

令和5年5月1日 教育政策課調べ

	中学校卒業年月	R 2.3 卒業	R 3.3 卒業	R 4.3 卒業	R 5.3 卒業	**R 6.3 現中3**	R 7.3 現中２	R 8.3 現中１	R 9.3 現小６	R 10.3 現小５	R 11.3 現小４	R 12.3 現小３	R 13.3 現小２	R 14.3 現小１
伊賀市	卒業者数	807	770	801	779	**785**	762	703	697	670	654	622	606	569
	前年度対比		▲ 37	31	▲ 22	**6**	▲ 23	▲ 59	▲ 6	▲ 27	▲ 16	▲ 32	▲ 16	▲ 37
	R5.3対比					**6**	▲ 17	▲ 76	▲ 82	▲ 109	▲ 125	▲ 157	▲ 173	▲ 210
名張市	卒業者数	642	659	654	642	**636**	675	637	642	635	610	579	564	567
	前年度対比		17	▲ 5	▲ 12	**▲ 6**	39	▲ 38	5	▲ 7	▲ 25	▲ 31	▲ 15	3
	R5.3対比					**▲ 6**	33	▲ 5	0	▲ 7	▲ 32	▲ 63	▲ 78	▲ 75
伊賀地域計	卒業者数	1,449	1,429	1,455	1,421	**1,421**	1,437	1,340	1,339	1,305	1,264	1,201	1,170	1,136
	前年度対比		▲ 20	26	▲ 34	**0**	16	▲ 97	▲ 1	▲ 34	▲ 41	▲ 63	▲ 31	▲ 34
	R5.3対比					**0**	16	▲ 81	▲ 82	▲ 116	▲ 157	▲ 220	▲ 251	▲ 285

伊賀地域県立高校の１学年学級数		27	27	27	26	**26**								
（　）内は入学定員の計		(1,080)	(1,040)	(1,040)	(1,000)	**(1,000)**								

（参考）

	中学校卒業年月	R 2.3 卒業	R 3.3 卒業	R 4.3 卒業	R 5.3 卒業	**R 6.3 現中3**	R 7.3 現中２	R 8.3 現中１	R 9.3 現小６	R 10.3 現小５	R 11.3 現小４	R 12.3 現小３	R 13.3 現小２	R 14.3 現小１
伊賀北部	卒業者数	747	708	738	718	**731**	681	641	630	610	594	574	552	515
	前年度対比		▲ 39	30	▲ 20	**13**	▲ 50	▲ 40	▲ 11	▲ 20	▲ 16	▲ 20	▲ 22	▲ 37
	R5.3対比					**13**	▲ 37	▲ 77	▲ 88	▲ 108	▲ 124	▲ 144	▲ 166	▲ 203
伊賀南部	卒業者数	702	721	717	703	**690**	756	699	709	695	670	627	618	622
	前年度対比		19	▲ 4	▲ 14	**▲ 13**	66	▲ 57	10	▲ 14	▲ 25	▲ 43	▲ 9	4
	R5.3対比					**▲ 13**	53	▲ 4	6	▲ 8	▲ 33	▲ 76	▲ 85	▲ 81

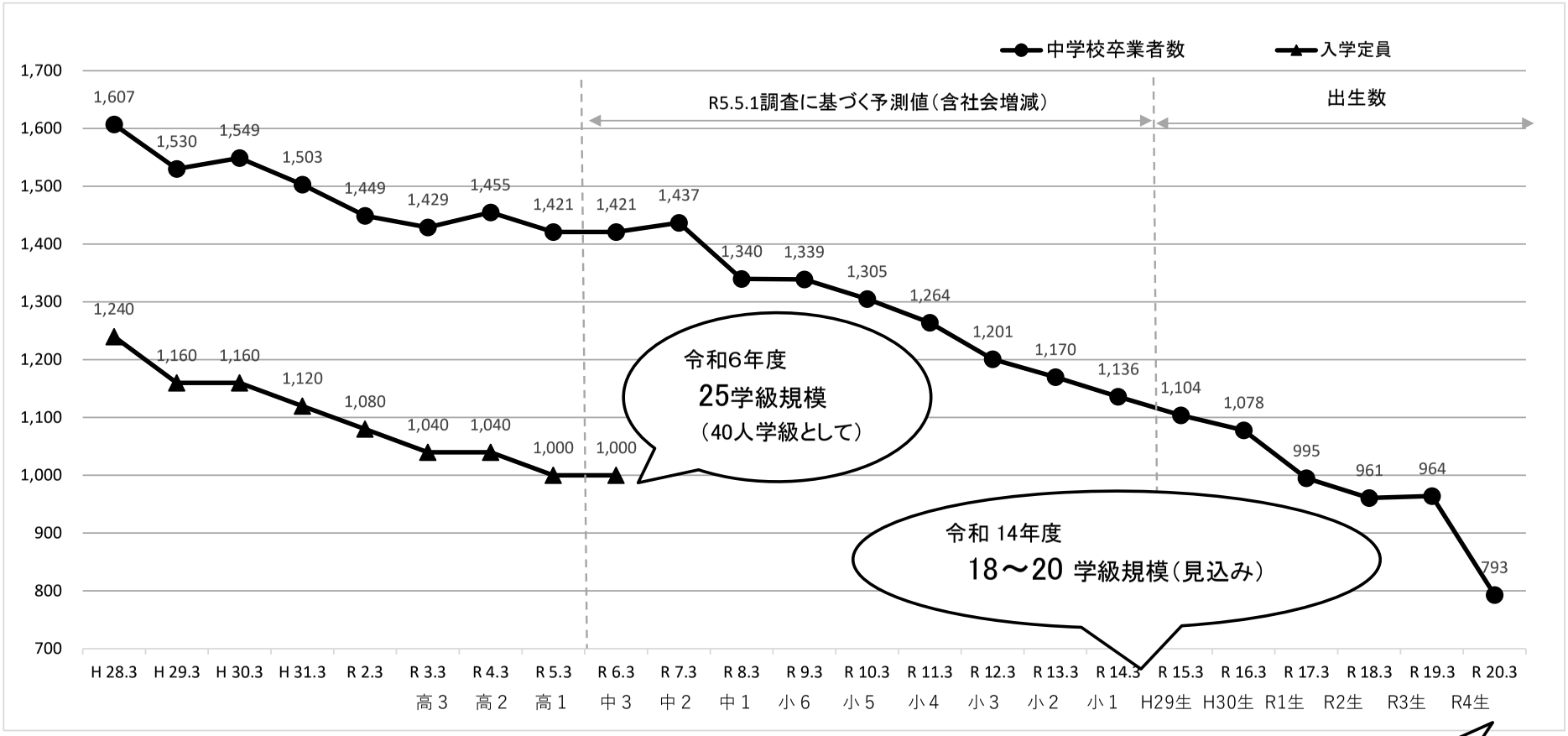
※　伊賀北部＝伊賀市から旧青山町を除く。伊賀南部＝名張市に旧青山町を加える。

（参考）

	中学校卒業年月	R 2.3 卒業	R 3.3 卒業	R 4.3 卒業	R 5.3 卒業	**R 6.3 現中3**	R 7.3 現中２	R 8.3 現中１	R 9.3 現小６	R 10.3 現小５	R 11.3 現小４	R 12.3 現小３	R 13.3 現小２	R 14.3 現小１
県内合計	卒業者数	16,489	15,777	16,244	16,055	**15,893**	15,669	15,463	15,253	14,747	14,408	14,045	14,001	13,487
	前年度対比		▲ 712	467	▲ 189	**▲ 162**	▲ 224	▲ 206	▲ 210	▲ 506	▲ 339	▲ 363	▲ 44	▲ 514
	R5.3対比					**▲ 162**	▲ 386	▲ 592	▲ 802	▲ 1,308	▲ 1,647	▲ 2,010	▲ 2,054	▲ 2,568

参考資料2

伊賀地域の中学校卒業者数と県立高等学校入学定員の推移



伊賀地域の出生数

	H28年度 現小1	H29年度 5～6才	H30年度 4～5才	R元年度 3～4才	R2年度 2～3才	R3年度 1～2才	R4年度 0～1才
伊賀市	643	582	569	533	534	527	434
名張市	584	522	509	462	427	437	359
計	1,227	1,104	1,078	995	961	964	793

伊賀地域の高等学校等の学科・コースについて

参考資料3

		学校名	大学科	募集定員（R6）		
伊賀地域全日制課程	県立	上野高校	普通科	240		普通科 / 普通科 / 普通科 / 普通科 / 普通科 / 理数科
	県立	あけぼの学園高校	総合学科	80		製菓調理　美容服飾　情報教養　健康福祉
	県立	伊賀白鳳高校	専門学科	240	1000	機械（35）・機械科 / 電子機械（35）・ロボット・電気工学 / 建築ﾃﾞｻﾞｲﾝ（35）・建築・ｲﾝﾃﾘｱ・デザイン / 生物資源（35）・生物資源科 / ﾌｰﾄﾞｼｽﾃﾑ（35）・ﾌｰﾄﾞｻｲｴﾝｽ・ﾊﾟﾃｨｼｴ / 経営（30）・経営科 / ﾋｭｰﾏﾝｻｰﾋﾞｽ（35）・介護福祉・生活福祉
	県立	名張高校	総合学科	200		文理アドバンス系列・人文専攻・看護医療専攻 / 総合ビジネス系列・ビジネス専攻・情報処理専攻 / 健康スポーツ系列・健康スポーツ専攻 / 表現デザイン系列・美術専攻・音楽専攻・ファッション専攻・映像専攻
	県立	名張青峰高校	普通科	240		普通科 / 普通科 / 普通科 / 普通科 / 普通科 / 文理探究
	私立	桜丘高校	普通科	155	155	普通科（155）

4系列/80人　7学科11コース/240人　4系列9専攻/200人　普通科系/480人

○全日制
※ 私立　愛農学園農業高校　25 人　農業科

○定時制課程
県立　上野高校　40 人　普通科
県立　名張高校　40 人　普通科

○通信制課程
私立　英心高校桔梗が丘　20 人　普通科：探求コース
※ 私立　神村学園高等部伊賀　70 人　普通科：選択登校型、全日型（両型合わせた年間募集定員　70人）

○高等専門学校
私立　近畿大学工業高等専門学校　160 人　機械システム、電気電子、制御情報、都市環境（3年次よりコース選択）　（※県外扱い）

伊賀地域の専門学科と総合学科の学び

参考資料４

専門学科の学び

【伊賀白鳳】

学科	学科名	コース名
工業	機械	機械
	電子機械	ロボット
		電気工学
	建築デザイン	建築･インテリア
		デザイン
農業	生物資源	生物資源
	フードシステム	フードサイエンス
		パティシエ
商業	経営	経営
福祉	ヒューマンサービス	生活福祉
		介護福祉

総合学科の学び

【あけぼの学園】

系列名
製菓調理
情報教養
健康福祉
美容服飾

【名張】

系列名	専攻
表現デザイン	美術
総合ビジネス	ビジネス
	情報処理
健康スポーツ	健康スポーツ
表現デザイン	ファッション
	音楽
	映像
人文アドバンス	人文
	看護医療

伊賀地域公立中学校卒業者の進路状況（５カ年比較）

参考資料５

区分	進路先	平成31年３月卒		令和２年３月卒		令和３年３月卒		令和４年３月卒		令和５年３月卒	
		人数	割合(%)	人数	割合(%)	人数	割合(%)	人数	割合(%)	人数	割合(%)
伊賀地域県立全日制	上野	270	19.1	264	19.2	260	18.8	269	19.3	238	17.5
	伊賀白鳳	259	18.3	252	18.3	229	16.6	230	16.5	230	16.9
	あけぼの学園	60	4.2	67	4.9	67	4.8	68	4.9	61	4.5
	名張	177	12.5	145	10.5	171	12.4	189	13.6	169	12.4
	名張青峰	258	18.2	250	18.2	222	16.1	226	16.2	224	16.4
	小計	1,024	**72.3**	978	**71.0**	949	**68.6**	982	**70.5**	922	**67.7**
他地域県立全日制	津	52	3.7	48	3.5	40	2.9	28	2.0	37	2.7
	津西	30	2.1	27	2.0	30	2.2	26	1.9	26	1.9
	上記以外　※１	70	4.9	74	5.4	61	4.4	50	3.6	52	3.8
	小計	152	**10.7**	149	**10.8**	131	**9.5**	104	**7.5**	115	**8.4**
県内私立全日制	鈴鹿	1	0.1	1	0.1	4	0.3	5	0.4	11	0.8
	高田	9	0.6	5	0.4	9	0.7	8	0.6	11	0.8
	三重	12	0.8	17	1.2	19	1.4	18	1.3	16	1.2
	桜丘	6	0.4	5	0.4	7	0.5	10	0.7	1	0.1
	上記以外　※２	3	0.2	9	0.7	10	0.7	7	0.5	7	0.5
	小計	31	**2.2**	37	**2.7**	49	**3.5**	48	**3.4**	46	**3.4**
県外全日制	国公立	10	0.7	10	0.7	8	0.6	8	0.6	6	0.4
	私立	52	3.7	51	3.7	62	4.5	59	4.2	54	4.0
	小計	62	**4.4**	61	**4.4**	70	**5.1**	67	**4.8**	60	**4.4**
定時制	上野	18	1.3	5	0.4	10	0.7	13	0.9	8	0.6
	名張	10	0.7	10	0.7	11	0.8	13	0.9	12	0.9
	上記以外の県内	0	0.0	1	0.1	2	0.1	0	0.0	0	0.0
	山辺高校山添分校	5	0.4	7	0.5	16	1.2	3	0.2	8	0.6
	上記以外の県外	2	0.1	2	0.1	1	0.1	2	0.1	0	0.0
	小計	35	**2.5**	25	**1.8**	40	**2.9**	31	**2.2**	28	**2.1**
通信制	県立（北星・松阪）	2	0.1	2	0.1	2	0.1	3	0.2	3	0.2
	英心桔梗が丘校							24	1.7	57	4.2
	英心伊勢本校	11	0.8	20	1.5	5	0.4	11	0.8	6	0.4
	徳風	8	0.6	6	0.4	13	0.9	5	0.4	2	0.1
	上記以外の県内	3	0.2	2	0.1	2	0.1	2	0.1	1	0.1
	県外	20	1.4	24	1.7	45	3.3	27	1.9	29	2.1
	小計	44	**3.1**	54	**3.9**	67	**4.8**	72	**5.2**	98	**7.2**
高等専門学校	鈴鹿高専	4	0.3	6	0.4	10	0.7	9	0.6	3	0.2
	鳥羽商船	2	0.1	2	0.1	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	近大高専	40	2.8	34	2.5	32	2.3	57	4.1	53	3.9
	県外	2	0.1	4	0.3	2	0.1	2	0.1	5	0.4
	小計	48	**3.4**	46	**3.3**	44	**3.2**	68	**4.9**	61	**4.5**
特別支援学校	伊賀つばさ学園	5	0.4	5	0.4	12	0.9	4	0.3	9	0.7
	上記以外の県内	1	0.1	0	0.0	0	0.0	1	0.1	1	0.1
	県外	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	小計	6	**0.4**	5	**0.4**	12	**0.9**	5	**0.4**	10	**0.7**
その他	専修・各種・職訓	1	0.1	7	0.5	4	0.3	1	0.1	3	0.2
	就職	8	0.6	5	0.4	6	0.4	2	0.1	6	0.4
	上記以外　※３	6	0.4	10	0.7	11	0.8	13	0.9	13	1.0
	小計	15	**1.1**	22	**1.6**	21	**1.5**	16	**1.1**	22	**1.6**
公立中学校卒業者数		**1,417**	100.0	**1,377**	100.0	**1,383**	100.0	**1,393**	100.0	**1,362**	100.0

令和５年３月卒業生

※１　桑名２、いなべ総合１、四日市１、四日市工業１、飯野３、白子３、亀山６、
津商業２、津東９、津工業９、久居１、久居農林１、白山５、
松阪３、松阪工業２、鼎学園２、宇治山田商業１　の計５２人

※２　津田学園２、海星２、メリノール１、皇學館１、伊勢学園１　の計７人

※３　進学待機、求職中など

伊賀地域公立中学校卒業者の進路状況（令和５年３月卒）

参考資料６

区分	進路先	伊賀市		名張市		伊賀地域合計	
		人数	割合(%)	人数	割合(%)	人数	割合(%)
伊賀地域県立全日制	上野	165	22.9	73	11.4	238	17.5
	伊賀白鳳	201	27.9	29	4.5	230	16.9
	あけぼの学園	42	5.8	19	3.0	61	4.5
	名張	50	6.9	119	18.5	169	12.4
	名張青峰	72	10.0	152	23.7	224	16.4
	小計	530	**73.6**	392	**61.1**	922	**67.7**
他地域県立全日制	津	10	1.4	27	4.2	37	2.7
	津西	7	1.0	19	3.0	26	1.9
	上記以外	30	4.2	22	3.4	52	3.8
	小計	47	**6.5**	68	**10.6**	115	**8.4**
県内私立全日制	鈴鹿	10	1.4	1	0.2	11	0.8
	高田	7	1.0	4	0.6	11	0.8
	三重	5	0.7	11	1.7	16	1.2
	桜丘	0	0.0	1	0.2	1	0.1
	上記以外	5	0.7	2	0.3	7	0.5
	小計	27	**3.8**	19	**3.0**	46	**3.4**
県外全日制	国公立	4	0.6	2	0.3	6	0.4
	私立	26	3.6	28	4.4	54	4.0
	小計	30	**4.2**	30	**4.7**	60	**4.4**
定時制	上野	7	1.0	1	0.2	8	0.6
	名張	3	0.4	9	1.4	12	0.9
	上記以外の県内	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	山辺高校山添分校	3	0.4	5	0.8	8	0.6
	上記以外の県外	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	小計	13	**1.8**	15	**2.3**	28	**2.1**
通信制	県立（北星・松阪）	2	0.3	1	0.2	3	0.2
	英心桔梗が丘校	10	1.4	47	7.3	57	4.2
	英心伊勢本校	0	0.0	6	0.9	6	0.4
	徳風	2	0.3	0	0.0	2	0.1
	上記以外の県内	0	0.0	1	0.2	1	0.1
	県外	10	1.4	19	3.0	29	2.1
	小計	24	**3.3**	74	**11.5**	98	**7.2**
高等専門学校	鈴鹿高専	3	0.4	0	0.0	3	0.2
	鳥羽商船	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	近大高専	24	3.3	29	4.5	53	3.9
	県外	3	0.4	2	0.3	5	0.4
	小計	30	**4.2**	31	**4.8**	61	**4.5**
特別支援学校	伊賀つばさ学園	5	0.7	4	0.6	9	0.7
	上記以外の県内	1	0.1	0	0.0	1	0.1
	県外	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	小計	6	**0.8**	4	**0.6**	10	**0.7**
その他	専修・各種・職訓	3	0.4	0	0.0	3	0.2
	就職	4	0.6	2	0.3	6	0.4
	上記以外	6	0.8	7	1.1	13	1.0
	小計	13	**1.8**	9	**1.4**	22	**1.6**
公立中学校卒業者数		**720**	100.0	**642**	100.0	**1,362**	100.0

令和５年度伊賀地域高等学校活性化推進協議会 委員

区　　分	所　属　等	氏　　名
学識経験者 （１名）	三重大学大学院 地域イノベーション学研究科　准教授	加藤　貴也（かとう　たかや）
有識者 （４名）	上野都市ガス株式会社　取締役保安工務部長	西垣　浩尚（にしがき　ひろなお）
	中外医薬生産株式会社　管理本部マネージャー	梶本　健太郎（かじもと　けんたろう）
	株式会社アサネットワーク　代表	伊集　基之（いしゅう　もとゆき）
	オキツモ株式会社 経営管理部総務課長	加藤　幸司（かとう　こうし）
ＰＴＡ関係者 （５名）	伊賀市ＰＴＡ連合会　顧問 （伊賀市立城東中学校ＰＴＡ）	清須　貴博（きよす　たかひろ）
	名張市ＰＴＡ連合会　顧問 （名張市立北中学校ＰＴＡ）	北川　昌司（きたがわ　しょうじ）
	伊賀地区県立学校ＰＴＡ協議会　会長 （名張青峰高等学校ＰＴＡ会長）	坂本　信人（さかもと　のぶひと）
	伊賀市内県立学校ＰＴＡ　代表 （上野高等学校ＰＴＡ会長）	西田　賢一（にしだ　けんいち）
	名張市内県立学校ＰＴＡ　代表 （名張高等学校ＰＴＡ会長）	安藤　美穂（あんどう　みほ）
市教委教育長 （２名）	伊賀市教育委員会　教育長	谷口　修一（たにぐち　しゅういち）
	名張市教育委員会　教育長	西山　嘉一（にしやま　よしかず）
小中学校長代表 （２名）	伊賀市小中学校長会　代表 （伊賀市立崇広中学校　校長）	二井　英夫（ふたい　ひでお）
	名張市小中学校長会　代表 （名張市立赤目中学校　校長）	山本　和弘（やまもと　かずひろ）
教員代表 （２名）	小中学校教員　代表 （名張市立比奈知小学校　教諭）	山口　徹也（やまぐち　てつや）
	高等学校教員　代表 （名張青峰高等学校　教諭）	藤髙　照也（ふじたか　てるや）
県立学校長代表 （３名）	名張高等学校　校長	堀　昌弘（ほり　まさひろ）
	あけぼの学園高等学校　校長	柘植　三治（つげ　みつじ）
	名張青峰高等学校　校長	水守　智士（みずもり　さとし）

計１９名